

二〇三三年四月二一日

遠蛙やがて小雨になりにけり
藤棚の下のお喋り尽きるなし
風に揺れ地に触れんとす藤の花
風立てば先陣を切る吹流し
伽羅路を煮て母の味探りけり
マイク音割れて絶叫観潮船

宏 虎
満 天
みきお
せいじ
もとこ
豊 実

二〇三三年四月二〇日

藤棚の下に寛ぐ老夫婦
藤房に見え隠れする蜂の尻
花虻が案内役や植物園
藤房の長きを撫でて登校す
よく見んと顔を寄せれば蝶翔ちぬ
鯉のぼり川面の風に上機嫌
もこもこと膨るるごとく山笑ふ

きよえ
かえる
こすもす
素 秀
せいじ
あひる
もとこ

二〇三三年四月一九日

慰霊塔包み込んだる夏木立
甘樫の丘に大和の春惜しむ

せいじ
せいじ
明日香

二〇三三年四月一八日

青鷺の冠毛ベッカムヘアームく
喬木の天辺さして蔦攀じる
新調のつば広帽子風薫る

せいじ
ぼんこ
なつき

二〇三三年四月二七日

給油所の高き庇に燕の巢
子等去りし砂場にはしや雀の子
藤房を梳き来る風のかほりかな

む べ
満 天
澄 子

二〇三三年四月二六日

坂がかかる大手門へと緑立つ
青麦の穂波の果てに伊吹山

はく子
隆 松

二〇三三年四月二五日

囀りに和す雨音や竹小径
堂内に響く雅楽や春の雨

む べ
こすもす

毎日句会みのる選・二〇三三年四月二三日